
もう一度

竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一度

【Zコード】

N2248BA

【作者名】

穹

【あらすじ】

物語とは何か。書き手、読み手、または作り手として、物語世界を渡り歩きながら探求していく夫婦のおはなし。
そしていつか一人だけの物語を手に入れる。

出会い

私が彼から教わったことは数多く、また彼も私から多くを学んだと語つていました。

彼は人一倍変わった運命を背負つていて、人よりすこしだけ運がなかつた。すぐについていけない私は、しかし、悲しくもなく、ただ悔しくて涙るいと思つてしまふのでした。

彼との出会いから語ることにしましよう。何の変哲もない、宝物のような学生時代の事です。

ふと気づけば彼は私の隣の席でじっと私を見していました。

「君は」

少し癖のある髪を整えようとせぬ、寝癖もそのままに、黒縁の眼鏡を持て余すように掛けている。

といつよりは掛かっているといつたほつがしつくじくするよつな、ど

こか垢抜けない彼の名は長田といつ。

「君は綺麗な顔立ちをしてるな」

「……突然どうしたの？」

私の顔はさぞや訝しげに歪んでいることだらう。彼の言葉が口説きにも取れる文句であつたからではない。

今は授業中なのだ。

「いやね。空を眺める君の姿をこの位置から見ると、何だかそれは有名な絵画のようで。

そんな考えが浮かぶと、その主題が気になるところだ。三十分考え抜いた末、これは君自身がテーマなのだと思い至った。
いやはや、なんとも大胆な一枚だ。この色鮮やかな水色も、額縁のなかの額縁ともいえる教室という枠さえ、君を表現するためだけに描かれているんだよ？

衝撃さ。ハンマーでガツンなんてもんじゃない。鉄球でガゴンさ。
そうすると、はて彼女の何を表現したいのか、そうして休み時間さ。
戦慄したよ。ここまで俺を惹き付ける君の存在に。

また、授業だ。俺はさらに觀察を続けた。同じ図になるまで幾度と先の絵を思いながら、いやしかし、もつ一度みてよつやく理解した。
顔なんだ。直接見えない故の表現の仕方は千差万別。だが、こうも纖細に書き込まれている。再び衝撃さ、鉄球なんて目じゃないさ、
隕石がドカーンさ。それを言葉で言い表したい。だが言葉なんてあまりに拙い、だからこんな言い方しかできない俺をどうか許してほしい。

そ、もう一度言つよ。

君は綺麗な顔立ちをしてるな

「えつと、とにかく座つて、ね？ 授業中だから」

「すまない。君は委員長だったね。先生にみんな、授業に水を差してすまない。どうか許してほしい」

何だか狐に化かされたような感慨で残りの授業も話半分でどうにも集中出来なかつた。

長田君の言葉が恥ずかしいとか、彼の奇行に引いていたとかではなく。

ただただ、それほどに衝撃的な行動だった。

休み時間になると先程の奇行についてクラスの皆が私と彼を見ながら「コソコソ」と話し合っていた。私としては、自身こそその話し合いに加わりたい気持ちで一般なのだが、どうにもそれは難しそうであった。

「長田君、少しいい？」

こうなつてしまえばいつそ、彼に事の理由を掘り下げるほうが皆も納得して沈静化も早いはずである。

彼は周りを気にした風もなく、つきの授業の準備をしていた。

「ん？ どうかしたかな柊さん」

「その、先程の事ですが

「先程……ああ、古文で『写し忘れていた所でも?』

「そうではなく、絵画が云々の話」

「なるほど、理解した。して、どうした」

「私がききたいよ……」

気にしていないというよりは、まったく問題という意識がないようだった。ここは呆れるべきところだが、大物かもしれないと思わずにはいられなかつた。彼は顎に手をあてて考える素振りを見せた後、目から鱗でも落ちたのか、唐突に喋りはじめた。

「委員長はタイトルが知りたいわけだな？」

「え？ う、うん。もつそれでいいです」「

「タイトルは『憂い』さ。実に奥深いだろ？」

「美術の評価は3だからよくわからないけど、長田君が変わってるのはよくわかった」

彼は嬉しそうに「そうかい？」といつて、笑いながら教室から出て行つた。次の授業は化学で実験だ。

しばらくは周りからの好奇の目は止まないだろうな、と自然に溜め息が漏れた。

それから、予想したよりもはやくこの事件については沈静化するのであるが、はてさて、学校全体に知れ渡るような大騒動の中心人物自身がなるとは誰に予想ができたことだらう。長田君の奇行からぴつたり三日後の授業中。

本日の指針程度に朝のニュースの合間にある占いを見る私であつたが、案外それは馬鹿にできないと思いしつた。

曰わく『今日のあなたは異性に振り回されそ。3の数字に不吉な予兆あり。携帯にストラップをつけていれば思わず危機を切り抜けられるかも』

三田田の三時間目。長田君が突然手を打つた。静かな教室に綺麗に響いたその音に、寝ていた人がびくりと肩を揺らして驚いているのが目にに入った。

「委員長！！」

「は、はい？」

かの一件以降、彼から私に話かけるのは初めてである。元々、事務的な事で数度言葉を交わした程度の間柄であつたし、彼もこぞつて

人に話し掛けようつむ人ではなかつた。

彼は唐突に私の腕をとると、手を握つて駆け出した。ぽかんとしている私含めたクラスの全員は長田君にされるがまま、行動を見守つた。「え？　え？」と私が動搖してゐる間に、まんまと教室の外に連れ出されたのだった。閉鎖されているはずの屋上に出ると、彼は手を解いて落下防止用のフェンスからちらりと下を覗いた。

「終さん」

「ちよつと長田君……どうにつけと……前の一件を含めて私に詫みでもあるの……？」

「落ち着いて。話をきいてください」

「落ち着いてます……。こんな行動をするあなたの方がどうかしますよ……。」

「すいません。お気持ちは察しますが、少し抑えてください」

「なんなんですか！　だいたい……」

続けようとして、背後からの物凄い音に思わず口も止まつた。同時に温かいとこり、熱せられた風が一迅あつとこり間に通つていつた。

爆発？　そんな単語が浮かんだ。映画の見過ぎかと振り払つ前にもうもうと立ち上る黒煙に事態を無理やりに飲み込まれた。

「興奮している時におまつにもな事があると案外冷静になりますよね。事の全容がわかるのは俺だけですが、どうです？　話をききたくないですか？」

是非もない。首を縦に振ると彼はにこりと笑った。

「……と、まあ、こんな感じですかね」

「冗談?」

「イッヅリアル。爆発との怒声をきいても否定しますか?」

彼の話は寝耳に水もいいところであつた。しかも元を辿れば原因が私というなんとも言い難い顛末なのである。

茫然自失な私を尻目に状況は常に動いている。長田君は屋上の扉の横に張り付くと、私に少し離れるように促した。理解する間もなく、扉の正面から十メートルほど離れたところで待機させられた。

次の瞬間、その扉が勢いよく開け放たれ、顔を覆面で隠した男達がなだれ込んできた。

四人の男達は何かもつたままそれを左右に素早く向け、また視線と首を素早く動かすと中央の男が仲間に手で指示を出した。私を取り囲むように近づいて、手にもつたそれが銃であると気づく。もはやそれがモデルガンでないことは百も承知である。

「こいつか?」

「はい、写真の人物です」

「無線入れとけ」

「サー。鷺より入電。ポイントRTにてウサギを確保。犬の姿はないし、対象を速やかに連行する」

恐怖に身が竦んだ。取り囮まれて、銃を向けられているかでは、恐らくない。しかし、歯がガチガチと噛み合はず、顔から血の気が引くのがわかつた。喉から呻きが漏れる。蚊のように高い音をたてて空気が抜けていく。

氣を抜いたら失禁してしまいそうな、恐怖が頭を支配した。

「い……やあ……や……だ……」しない、で……え」

情けない叫びが口をついた。声やなつてないであろう、恐怖に突き動かされた叫び。

意識の糸が途切れる寸前、長田君が扉の裏から飛び出していくのが見えた。

目が覚めたのは、それからすぐのことだった。男達が倒れて血を流していた。すぐに辺りを見回せば、長田君が苦しそうに腕を押さえていた。先を迫れば血溜まりに気がつく。

「銃弾が当たると、ただ通り抜けるとこうよつ、物体が破裂しているように見えるんですよね。ま、動物に当てるか、物に当てるかで違いますがね」

「長田君ー、血が……！」

「大丈夫ですよ。皮膚を抉つただけですから。心配なのが失血が酷いことなんですがね。傷は浅いようです」

「どうしようー、どうしたらいいー!? 私のせいだ！『めんなさい！』……『めんなさい』

「ユリ様。泣かないで下さい。状況が状況なだけに、切り抜けるためとはいえ危険な目に晒してしまったのは俺なんです。気負う事も、

「謝る」ともあればいい

「駄目！ あなたが痛い思いをするのが筋違いないじゃないか！」

「……じゃあ、悪いですが倒れてる奴らのポーチを漁つて貰えませんかね。気分の良いもんぢやないですが、包帯でもあると助かりますんで」

言われて、一番手近に倒れている男のポーチを開くと、包帯と固定用のテープリングなんかが出てきた。治療をしてあげたかったが、包帯の巻き方するくにわからない私は彼にそれを手渡すことしかできなかつた。

手慣れた様子で傷口を縛り、解けないよじてしつかりと固定した。肩口も縛るといつのでせめてそれだけはと手を貸した。

「助かりました。これで少しはましでしょう」

「いめんなさい」

「お礼をこわれる」とはあっても謝りる」とはないと思っています

長田君は男達から無線とポーチを引っ剥がし、自分に装着した。銃を傍らにおくと、今度は服を脱がしにかかつた。

何事かと思つてみると、それを察したのか「チヨッキ」とだけ言つて、一見釣り用のベストかなに見えるそれを脱がした。
彼は私に着るよつに促すがどのよつに着ればいいのかまるでわからぬ。

「服の下に羽織つててください」

そうはいうが、不格好もいいところである。制服はそもそもゆつたりした造りではないから形が出てしまう。そんな事を気にしている場合でもないが、気になってしまふのだから仕方がない。

「アハハハハハハ！！ ひと昔前の『足歩行ロボットみてえ…』」

長田君は私のその姿を見て大笑いした。傷口をつつくと痛がりながら謝ってきたのでひとまず許した。

一段落し、長田君は小休止というと、屋上の陰まで私を導いた。そこでポーチから折りたたまれた紙を取り出し、床に広げた。どうやら学校の見取り図らしい。ところどころに赤や黒色の字で書き込みが見られる。

「質問があるって顔ですね」

「…」

「ダメですね。定期連絡が入らなかつたら、俺なら即座に応援か偵察出しますよ。だから、あのタイミングまでまつた。勿論、直ぐに気づかれるでしょうね。連絡入れてから約十分、無線すら入らないということは……」

「ハーイ。ビー、もっちはど？」「…」

「流石だカメリア。信じてたぞ」

「そこは映画っぽく愛してるつてこつよね…」

「愛してるぜカメリア」

「……おふやけはこのぐらいにして、現状の確認をするわね。ひと

まず、ホームルーム棟の東側は制圧済み。本部はその一階。こいつの対応に終わってるからしばらくは動きやすい筈よ。階段周辺の警備が手薄な所から一階まで移動して、また通信を頂戴

「了解。しかし、まだ西側を制圧できていないか。まあいいな。人質は？」

「体育館と講堂、後は管理棟の一室。やられたわ、こちらも下手に動けない。最悪、対象の安全だけを優先せざるを得ないわね」

「一力所に固めない……かなりの規模が予想されるか。こちらの装備は奪つたかなり旧式の突撃小銃のみだ。応援を頼みたい」

「無理ね。そもそもこの作戦にあまり人数を割けてないもの。要請から三十分もせずに駆けつける部隊よ？ 言わずもがなでしょう」

「準備しても程度は知ってるか。仕方がない。本隊の出動はいつ頃になると思う？」

「早くて三時間後ね。もう！ なんなのよ。報道規制は既に敷かれてるのに！」

「その手の仕事はお得意だろ。通信を終了する」

携帯電話を閉じ、今のやりとりを持ち無沙汰にただ見ていただけのこちらを向くと肩を竦めてみせた。

「レミ様。いきますよ」

そういうつて、彼はまた私の手をひいた。

ひとつ下の階段の踊場まで行くのにすらゆづくと慎重に進む。長田君の指示の下、声だけは絶対に出すなと言われた。手を私の前にだして、人差し指で床を差した。その、一いつで待機しろという指示に頷く。

長田君は先にいつて左右を見回す。きっと安全を確認しているのだろづ、あたりをつけた。

そして来いというジェスチャーを受け、また彼の後に続いた。一階と一階の間の踊場まで降りると、またもや待機を命じられた。ちらりと下を覗くと男が一人、階段に座つてなにか話しかけていた。

「おい、聞いたかよ。あっち側のほうでなんかあつたらしいぜ」

「みてえだな。まあ、決まつた仕事やつときや金貰えるんだし、命令なけりや出張るこたあねえだろ。こつけこなあれもあるんだし」

「お前はマイペースだな！ 他ん所はおおわらわだぜ？」

「やうひつお前だつて俺とサボつてんじやん」

「ちぢめえねえ！ ま、こんな所に誰も来やしないしなー！」

しばらく様子をみていた長田君は、先ほどの男達から奪つたポーチから折り畳み式の小型ナイフを取り出すと階段の手すりに腰をかけ、音を立てないように滑り降りた。

「ん？ なんだおまえ！」

首にナイフを突き立てられて倒れてた仲間をみてよづく存在に気づいたのか、銃を構える男。対して長田君は、それよりも速くあらかじめ構えていた銃で男の頭めがけて引き金をひく。

倒れた二つの死体からは血がみなみと溢れていた。不意に吐き気を催して、口元を抑えたが隙間から逆流した物がぼとぼとこぼれた。まるで映画のような光景だったが、それとは違った視点は決して外れない。容赦もなく映し出された。

「今は周りに誰もいないようです。……ごめん、ただ死体を見るのとはまた訳が違うよな」

「どうして……どうして……」

彼に対する疑問ではなかった。現実味がないし、殺人についてどうこうと言いたいのでもなかった。わからなかつた。

同すればいいのか、どうなるのか。どうして疑問が起じるのか。なにを知りたいのか、なにを説明されれば納得するのか。色々な感情がじりじり混ぜになり、出てきた言葉。

「もう少しだけ、心を強く持つてください。せめて、安全な所行くまで」

「「めんなさい。」「めんなさい……」

今度は彼もなにも言わなかつた。

それから何事もなく、涙をボロボロと流しながら手を引かれてきた私はカメリアと呼ばれる女性に預けられた。ただ泣きじゃくる私を彼女は優しく抱きしめて、頭を撫でてくれた。泣きはらし、疲れ果てて眠るまで彼女はそうしてくれていた。

後に、この一件は私の知っている事実とは多少異なる形でテレビで

田にすることとなつた。

ここまでが発端。

彼が再び現れたのは、私が後悔できるほどに心に余裕を取り戻した時だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2248ba/>

もう一度

2012年1月5日18時46分発行